

ダーリン・イン・ザ・タイタンフォール

兄王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイタンはパイロットと息を合わせることで最大の力を発揮する
フランクスは男女一組が心を通わせることで真の姿と力を現す

遠い未来。人類は高エネルギーを秘めたマグマ燃料の求め、搾取し過ぎた末に環境を大きく激変させてしまった。人類は過酷な環境から逃れる為に移動都市を築き、文明を謳歌していた。だが突如現れた突如として謎の生命体『叫竜』が次々に都市を襲撃し始めた。人類は叫竜に対抗する為のロボット兵器FRANXXを作り上げ脅威からその身を守って来た。

だがそんな中たった一人で戦い続ける兵士と兵器がいた。人類最後の兵士として終わりのない戦い続ける彼がその先に目指すものは、一体何か？これは人間になりたいバケモノと翼を失い飛べなくなったコドモと戦場に己を求める兵士の物語だ

目次

独りの兵士と兵器	1
彼の役割	4

独りの兵士と兵器

機械のような鳴き声。飛び散る青い血の匂い。そして無数に延々と現れるバケモノ達の姿。俺は奴らが現れるずっと前から戦場に入った。

昔も今も相手が違うだけでやる事は変わらない。目の前の敵を殺すだけ。それが一介の兵士である俺に与えられた役割だ。

「倒して倒してもキリがねえ。いつまで湧き続けるんだこいつら」

『パイロット。残りエネルギー残量が30%に到達しました。これ以上の被弾は避けてください。私としては一時撤退し体制を整えた方がよろしいかと』

「無茶言うねえ AT。俺が此処から離れてたら誰が都市を守るんだ？ 都市の防衛システムだけで捌ける数じゃあない事は目に見えて明白だろ？ コアはまだ残っているし弾も十分ある。まだいけるさ」

『……パイロット……また貴方はそうやって無茶をするんですか？』

「余計な心配は無用だAT。どっちしろ撤退は許されないし、ゼロツもいる。ささっと片付けて終わりにしよう。AT、アップグレードコアスタンバイ！」

『…了解。アップグレードコア、スタンバイ』

「全機、散開して一齐に畳み掛けるぞ！ 用意はいいな？ それとゼロツ、お前も手伝えよ？ 一応チームとしてやってんだからな」

『…了解！』』

『うるさいなあ、いちいちボクに指図しないでよ。弱い奴同士でやればいいじゃん。それにボクが前に出ればすぐに終わるし。二人掛かりで守る必要はないと思うけど』

「そう言うな、ゼロツ。あとでご褒美に飛び切り甘いキャンディやるからよ。それにこの作戦が終わり次第此処を出るから最後までいいチームとして付き合ってやれ」

『ちよつと、ボクをコードモ扱いしないでよ。ボクはあんな弱つちい奴らとは違うんだから。まあくれる数次第では付き合っただけでもあげなくもないけど 幾つくれるのかな？』

「俺からすりやお前だつて充分コドモだつての。それと数か？　そうだな5個だ」

『ダメ、少ない』

「じゃあ7個だ」

『もつと』

「9個」

『全然足りない』

「つたく分かったよ。12個だ。これ以上はあげられないぞ」

『乗った！　それじゃゼロはささつと戻つて用意して置いてよ。こいつらはボクが一人で全部片付けるからさあ』

「おい。人の話を聞いてないのか？　俺はチームとして付き合つてやれと言つた筈だが？　誰が一人でやれと言つた」

『ボクは弱い奴らとは馴れ合うつもりはないよ。それにボクが叫竜がいつぱい殺せばそれこそチームに貢献した事ならないのかな？』

「あのなあ、ゼロツ―俺はそういう事を求めているわけじゃねえんだよ。第一、お前の無茶な行動であいつらが何回死にかけたと思つてるだ。頼むから周りを巻き込むような危険な真似はやめてくれ」

『何？　説教のつもり？　いくらゼロでもボクの邪魔をするなら容赦しないよ』

「だから、それをどうにか……」

『パイロット。複数の叫竜がこちらに向かって来てます。どうやら撃ち漏らしたようです』

『ほら、来たやつぱりボクが前に出た方がいいじゃん。それじゃあ後はよろしくー！』

「あっ！　おいっゼロツ―！　勝手な行動は……行っちゃまった……つたくしよーがねえーなあ。一号機、聞こえるか？　応答しろ」

『こちら一号機。ゼロさん。どうかしましたか？』

「ストレチアがそっちに向かった」

『えっ！　Code:002がどうして!?!』

『ストレチアが!?!』

『今回の作戦ではあいつは前線には出ない筈じゃあなかったのか!?!』

「すまん。抑えきれなかった。俺もこっちが片付き次第すぐに向かうからストレチアに巻き込まれないに注意しつつ持ち堪えてくれ。頼んだぞ」

『りよ……了解！』

『ゼロさんが来てくれるなら……』

『でも無理はしないでください。俺達だつて一人でも出来ますから』
「俺の心配をする前に自分達の心配をしろ。此処は戦場。少しの油断が命取りになるぞ。俺はそういった奴らが沢山見てきたからな。それじゃ各機気合を入れ直すぞ準備はいいな？ 此処は一匹たりとも通しはしねえぞ。 作戦開始！」

『『おうっ!!!』』

『無駄に暑苦しいね。まあ精々ボクの邪魔をしない程度に頑張つてよ』

俺は人類最後の兵士として今も終わりのない戦いを続けている。

彼の役割

ゼロツターの勝手な行動により危うく作戦失敗になりかけたが最終防衛ラインに逃げ込んだ叫竜をすぐに片付けてすぐにフォローに向かったのでなんとか事なきを得た。

「おい、ゼロツター。単独行動時は何をしても別に文句は言わねえがチームで行動中にあんな真似をするのはやめてくれ。俺がフォローに向かわなかつたらまたあいづらが孤立するところだったぞ」

作戦が終わり次の都市へ移動する準備をしてる中、俺は頭に生える赤い二本角が特徴の少女もといゼロツターに文句を垂れる。

「別にいいじゃん。うまくいったんだし。それに孤立した原因はあいづらがボクに付いてこられなかつたからでしょ?」

彼女は俺がご褒美に上げたキャンディを口に咥えながら心底どうでもよさそうな顔をする。

「あのなあ、ゼロツター。結果良ければ全て良しってわけじゃねえんだぞ。少しでもいいから他人と合わせることが出来ねえのか? このままだといくら叫竜を殺し続けても、人間に近づくことなんざあー出来ねえぞ?」

「余計なお世話だよ。それにまた説教? ボク、そーゆうの好きじゃないんだけど」

「ゼロの言う通りだぞ。Code:002。お前の身勝手は度が過ぎている、少しはパートナーの俺の身にもなってくれ」

「おお、やっと起きたかCode:081……いやヤイチ怪我の具合はどうだ?」

全身包帯だらけで腕をギプスで固定しボロボロの状態で現れた男は、ゼロツターのパートナーだ。まあ……こいつで丁度二十人目なんだけどな……

「その名で呼ぶのはやめてくれないのか? いやそんな事より怪我の具合か。そうだな正直あまり良いとは言えないな。まだ横になっていたい気分だ」

「まあ、そりやそうだろうな、その状態じゃまだ安静にしておきたい所

だがそうもいかねえ次の都市へ移動しなきゃいけないからなあー。ヤイチ、お前は先に輸送機に乗って休んでろ。でなきゃ死ぬぞ？

ゼロツィからは、俺が代わりに言っておくからゆっくりしてろ」

「ああ、そうさせてもらう。あとは頼むゼロ」

そう言つて輸送機に歩いて行くヤイチを見送つたあとゼロツィに視線を戻す。

「つうーわけだ。ゼロツィ。パートナーからもああ言われてんだ。ちいっとは改善したらどうだ？」

「ないよ。ボクはボクだ。弱い奴らの指図なんて聞くつもりはないよ」

ああ、ないすつか。そうですか……ホント困つたヤンチャ娘だよ。

「それにさあ、ゼロ。あいつのこと心配しているけどどつちしろ次の出撃で死ぬんだし。心配した所で意味はないと思うだけだ」

「その死ぬ原因を作っているどこの誰かさんだよ。おめえーさんの『パートナー殺し』はどうかならん物かねえー？」

そう、ゼロツィはただのパラサイトではない。叫竜の血を引いており搭乘したステイメンは老化などの不調が現れ、3度目の出撃で必ず死ぬことから、通称『パートナー殺し』の悪名をもちゼロツィと乗るステイメンは使い捨て扱いとなっている。

「お前が理想のパートナー……いやダーリンだっけ？ それさえ見つけてくれりゃ、俺は一々別れの挨拶しなくて済むんだけどな」

ホント、死ぬ事が分かつて出撃させんのは結構辛いだぜ？ こればかりは慣れないもんだよ。

「無理だね。それが出来ないのはゼロがよくわかっているでしょ？ ボクはバケモノ。あいつらは所詮ボクの餌に過ぎないんだ」

「おお、怖い怖い。その勢いで俺まで餌にするのはよしてくれよ？」

「それ、わかつてて言つてるの？」

「二人ともおしやべりはそこまでよ。そろそろ出発するわ。早く輸送機に乗ってちょうだい」

俺は声のする方へ顔を振り向く。

「その声はナナか。わかった。よしゼロツィさつさと乗れ出発する

ぞ」

「はあ——い」

彼女は俺の仕事の同僚みたいなもんでなんでも次に行く13都市のパラサイトもといコードモ達の世話係を一任されてるらしい。

「しかし、13都市か……」

正直な所、あまり気が進まないな。あそこはかつて俺が救えなかった部隊がいた場所だ。そして俺が変わるきっかけ与えた場所でもあるのだ。

「どうしたのゼロ？ そんな顔をして。早く出発するわよ」

「ああ、悪い。少し嫌な思い出を思い出しちゃってよお。今行く」

どうやらかなり顔に出てしまったらしい。やれやれ、かなり足取りが重くなっちまったなあ。

「待ってください！ ゼロさん!!」

「ん?」

「誰!？」

突然俺を引き止める声がこちらに走ってくる足音とともに聴こえてきた。

「あなたは……Code:090! どうしてあなたがここに!？」

「やはり来たか、クロ。お前ならきつと来てくれると信じてたぜ」

息を切らしながら来た彼はクロ。この26都市部隊のリーダーだ。

「来たも何も、ゼロさん。あなたがここに来るように俺達に仕向けたでしょう? こんなカードと手紙を用意して!」

そう言つて手に出して見せてきたのは俺がわざと置いていったSランクのIDカードと置き手紙だ。手紙の内容は、大雑把に言えば俺が此処を離れるので、もし見送る気があるならこのカードを使って手紙に書いたルートを辿つて来てくれと書いておいた物だ。

「ゼロ、またあなたは余計なこと……この子が此処に来た理由はそういうことなのね……」

「すまん、ナナ。別れの挨拶なしに去るのは俺の流儀に反するからな。出発は少しだけ待ってくれすぐに話をつけるからよお。それと

周りのお前らは銃を降ろせ。コドモに銃を向けてんじやねえよ」

呆れるナナを説得しつつ周りの兵士に銃を降ろすように指示する。
「……分かったわ。なるべく早く終わらせてちょうだい。けどこの事はパパ達に報告させてもらいますから、ゼロ。何かしらの処分は受けてもらう事になるわよ?」

「構わん。どうせ俺を消すような真似は出来ねえし。他の奴らは代わりはいくらでもいるが、俺の代わりはいないからな。クロを招いたのは俺の責任だから処分くらい幾らでも受けてやるよ」

「そう……また、最前線行きになつても知らないわよ?」

「それはむしろ大歓迎。俺は戦い以外に居場所はねえからなことそんな中で死ぬるなら本望だよ」

まあ、今はある目的を達成するまでは死ぬ訳にはいかねえだけだな。

「さてと……待たせて悪かったなクロ。よう来てくれた。他のみんなはどうした?」

「他の仲間達は怪我で動けないので、俺がみんなの代わりとして来ます。そんな事よりもゼロさん。此処を離れるつてどういう事ですか!」

「いや、どうしたのなにも今回の作戦を最後に此処を出る予定だったからな。お前達には黙つとくように言われてたんだけど何も挨拶なしに去るのは寂しいからよお。こうやってクロ。お前を呼んだつてわけさ」

「お願いです。ゼロさん! あなたには、まだ此処に残つて欲しいんです!」

「おいおい、手紙の内容を見ていなかったのか? 俺は別れの挨拶をしたいと書いただけで残りたいとは一言も書いてないぜ? それにそれはお前の我儘だろ?」

「違います! これは俺達全員の願いでもあるんです!」

あらら、まさかここまでして引き止めようとするとなあ。別に初めての経験ではないが心苦しいもんだよ。

「クロ。お前だつてわかつてんだろ? 俺はずっと居られる訳ではな

いのは最初の時に話したろ？ 俺の役割は終わったんだよ」

「で……でも俺達はまだ、あなたに教えて貰いたい事が……」

「大丈夫だ。もう、俺が教える事は何もない。次はクロ、お前達が考えて行動するんだ。それに今回の作戦だって俺にすぐに助けを求めず最後まで自分たちで持ち堪えようとしたじゃないか。だからよお、そんな顔をしてんじやあねえよ。なあ？」

「ゼ……ゼロさん……お……俺は……あなたに会えて救われたんです。だから……」

彼は、泣くのを必死に堪えて歯切れが悪くなりながらそれでもなお引き止めようする。いくら何度も叫竜と戦って来たとはいえそこら辺はまだまだコドモだな。

「クロ。リーダーのお前がそんなんでどうすんだ？ これからチームを引っ張っていくんだろ？ なあに別にこれで会うのは最後ってわけじゃねえからよ。会う機会はいくらでもあるさ。だからよおその時まで生き延びてくれよ？ 頼んだぞ」

そう言つて彼の頭を撫でて軽く叩く。全くまさか一度は捨てかけた感情をもう一度持つことになるなんてよお。少し前の俺なら考えられなかったよなあ。あの頃の俺は強い兵士して育てあげればいいと思つていたからな。だが今は違う、人として一人の人間として育てあげている。まあ、ゆくゆくは俺の目的達成の為にとしてもやっつけるんだがな。

「……わかりました。ゼロさん。俺達をご指導して頂き有難うございました！ この恩は決して忘れません!!」

「おう、また会おうぜ。今度会う時はよお立派なリーダーになつてろよ？」

彼は泣くのをやめ、敬礼をしながら俺を見送る。俺は振り返らず背を向け手を振りながら輸送機に向かって歩いて行つた。

「やっと終わったか。老いぼれ兵。全く余計な事をしおつて。さきつと座れ出発するぞ」

「うっせ、てめーだつて老いぼれ博士だろがよお。久しぶり会つて最初のセリフがそれかよ」

輸送機に乗り込むと先に座って待っていた、体の一部が機械化した老人から文句を言われた。彼の名はフランクス博士。フランクスの生みの親で俺とは長い付き合いになる。

「お前さんが何をしようが俺の知った事ではないが、次の都市では俺の指示に従って貰うぞ」

「何だよ。次の都市は博士、あんたの実験場かよ。APEあの老害達から頼まれたのか？」

「違うわい、これは俺の独断でやっとする。年寄りの気まぐれというやつだ」

「そうかい。あんたはあんたの考え方があるのかい。まあ、どっちにしろお互いに目的は同じだし協力してやるよお」

「ゼロ、博士。まなもなく出発するのでベルトを…」
「うむ」

「わかってるっての」

さて、いよいよ13都市に向けて出発だ。今のうちにコドモ達のデータを見ておくか。あとジャービスにATの調子がどうか連絡もしねえとなあ。離陸し揺れる機体の中、俺は缶コーヒーを片手にそんな事を考えていた。